

創作論（そのⅠ）

——色と音からのメッセージ——

松　　里　　雪　　子

は　じ　め　に

副題として、色と音からのメッセージと書いてあるが何に対して（誰に対して）のメッセージなのかと言えば、それは文字に対しての（あるいは一人よがりの自己満足の領域で言わせていただければ、わたし、に対しての）ということになる。随分抽象的な副題の気もする。何故この副題を選んだのかと言うと、わたしは色も音も好きだから、文字と同じ程好きだからである。そしてその好きなものの正体を見極めたいと思ったからである。

この創作論をわたしは作法通り起承転結をそのまま取り入れて起の章、承の章……という分け方をして書いてみようと思った。今回は起・承まで、次回はそれを受けて書いてみたい。

わたしは人は何故ものを創るのかという模索の過程のなかで色とは何だろう、音とは何だろう、文字とは何だろうとその使命と働きは何かということの色と音が好きだという前提のもとにすすめたいと思った。わたしは色と音に恋い焦がれており、絶えずそのものの存在を身近に置いていたいと願った。また時には同化したいとも願った。そしてそれはほんの一時^{いつとき}だったかも知れないが果たしたかの錯覚に酔ったこともあった。しかし醒めて全く異質のものであることを思い知らされた時愕然としたがあらためてそれぞれの存在の意味を認識できた思いがあって安堵したことも確かであった。

そのような経過を転の章では高村光太郎の『美について』と宮澤賢治の作品のことと岡本太郎の縄文土器に対する思いと宇佐見英治の『土と空間』という文章などから　創る　ということの本質の模索を更にすすめ、結の章では音の持つ時と空間との関わりあいに加えて丸谷才一の文章から受けた衝撃とミヒャエル・エンデの作品『モモ』と『はてしない物語』から文字の使命に立ち返り、色と音からのメッセージに対する文字からの恋文に終止符を打つことができれば仕合わせだと思っている。

起

前田雨城はその著『色』の はじめに と題した冒頭の文章で

本書には、色の標本をつけていない。それは色が、音・味・臭い・手触りなどと同じく人の感覚によるものであるからである。感覚は人の生活する上での重要な部分であるが、その感じ方が人によって異なるのが普通である。といっても、人々の色に対する関心は強く、古い昔から生活上の広い範囲にわたって人と色との関係はもちつづけられて、現在に至っている。(中略) 感覚的で、形もなく、質量ももたず、そして光の種類によって容易に変化するものが色である。(以下略)

と書いている⁽¹⁾。また『廣漢和辞典』の色部の 色 を見ると、① いろ。㊦ かおいろ(顔色)。① いろどり。色彩。㊧ 色彩のぐあい。いろあい。㊥ つや。光沢。㊦ おもむき。ようす。状勢。㊧ 形に表われたすべてのもの。形相。㊦ しな(品)。たぐい。種類。㊧ 男女間の欲情。㊧ 美しい容貌。② いろどる。かざる。③ いろだつ。いろづく。㊦ けしきばむ。怒りの表情を顔に出す。むっとする。① いきおいづく。生気づく。㊧ おどろく。驚いて顔色を変える。④ おだやかな顔色になる。[国]いろ。① 階級で定まっている染め色。当色。② 衣服の染め色の禁制になっているもの。禁色。③ 喪服のにび色(薄墨色)。④ 結婚式・葬式のときに、上にきる白衣。色着。⑤ 容貌・姿・髪などの美しいこと。⑥ おしろい。化粧。⑦ 調子。ひびき。⑧ 興味。趣味。⑨ なさけ。愛情。⑩ 恋愛。⑪ 情人。恋人。愛人。⑫ 遊女。⑬ きざし。ようす。⑭ 醤油。⑮ べに(紅)。(総べて説文は省略)とある。そして解字には会意、人+月。月は、ひざまずく人の象形。ひざまずく人の上に人があるさまから、男女の情愛の意を表す。派生して、美しい顔色、いろどりの意を表す。とある。

わたしが最も強く興味を感じたのは上記の項目のなかでどれかというとその項目総べてということになると思う。しかし総べてに関して述べるということではなくその項目総べてを含んでいるというところでの 色 としてなのである。御都合主義の欲ばりなのだが更に加えたいと思うのは、もっと拡大解釈をして絵画と音楽との関連についてである。もちろんそれは絵画にあらわれ~~た~~た色、音楽(音)についてである。なにのためにするのかと言うと、それは魅了されて仕舞ったということの他にはなにもないのである。わたしを魅了した色と音。色には形がない、音にも形がない。そして重さがないから掴み取ることができない。そのところで魅了されたままでは不安で仕方がないのである。その不安を取

り除くために、形も重さもないものを掴み取ることができるのかできないのか、確かめてみたい。なにを用いて、どんな方法で——文字を頼りに鑑賞という方法でということになる。そしてそのことから「創作とは何か」ということが模索できれば仕合わせだと思うのである。

前田雨城がその著『色』のなかで書いているように、色は光の種類で容易に変化するものである、ということ。確かにこの言葉は容易に納得のゆく言葉である。

たとえば広葉樹・針葉樹の交互に、あるいは雑多に植えられた山々。その山々から流れていく川。そしてその川のほとりにある田・畑・家々とどこにでもあるような田園風景があったとする。同じ場所に同じものが配置されてあったとしても、朝・昼・晩と時刻が刻々と移り変わってゆくたびにその様相は変化する。そこで営みをしている人間はその様相（時による光の変化、そこから派生しての様相の変化）に応じて身体も心もその在り方は変化していくものと思う。ほんの一日のなかにおいても。 榊 莫山はその著『書のイメージ』の 土の肌から という文章のなかで次のようなことを書いている。

林や山は、眠っている日もあるし、目を光らせている日もある。描きはじめたときは眠っていたのに、描いているうちに目をさましてしまう日もある。

わたしは、柔らかい線描を交錯^{こうさく}させながら、山に棲む精霊や林にひそむ霊光のようなものを、心象の風景として描きつづけた。風景のなかにも、白い柔らかい感触をぬりこめぬものかと思いながら。

山や野の風景に向かって、心をゆらめかせるとき、不思議にもイメージの開放感を全身に覚える。季節や時間の移り変わりによって、風景はじつに微妙なうつろいをみせてくれるからだ。（略）

ときに、風景は、人の心の立ち入ってくるのさえ拒むことがある。山や林の容姿^{かたち}や彩りが、厳^{きび}しかったり激^{はげ}しかったりするからではない。山に棲む精霊や林にひそむ霊光のようなものに、おそろしいほどの妖しさを感じるときだ。（略）

そこに妖しさを感じるのは、山の形や林の姿ではなく、光と影がおりなす色の翳^{かげ}りが、おりおりの妖しさを生んでいるように思われてならない。そんな日には、こちらの心にもつめたい戦慄^{せんりつ}がわいて、精神の音律は細く鋭く高鳴ってしまう⁽³⁾。

そしてそういう心が冴え冴えとした日にはすべてのものが美しく見え、自然を温かなものに感じ人間の匂いが人恋しくなるというようなことを書いている。

竹に花の咲く年は凶作になると聞いているがその竹の花に^{おび}怯え日照りの少ない涼しい夏に憂えるのは農民だけではないだろう。また^{しげ}時化が続き獲物の少ないことに嘆くのも漁民だけではないだろう。

わたしたちの誰ひとりとして自然と関わりを持たずに存在している者はいない。その生命を維持することにも、また生きていることを謳歌するにしても、その総べてが自然との関わりの中なかでしか存在しないものである。描きはじめたときは眠っていたのに、描いているうちに目をさましてしまう日もあると榊 莫山は書いている。一日の中なかにもそれだけの明暗を見出し動かされるという。ほんの一日という時間の流れの中なかにおいてさえこうなのであるから、これが何か月、何十年、あるいは何百年と月日を重ねたならどうなのだろう。自然はかわるだろうか。人はかわるだろうか。

今や大都市の周辺にある近郊の土地はその都市に住む人間のためのベッドタウンとしてその様相を変えている。林の木は伐られ、山は崩され、川はその流れを変えられて、かつてはそこに住むはずのない人間が多少の異和感を、努力をし修正しながら住んでいるというようになってきた。それではこういう様相の変化を見せているのは現代という今がはじめてなのだろうか。現代は自然の持つ領域の枠を越えて侵しているということは大いにあり得る事実の感がある。しかし科学の技術が現代ほどにすすんでいなかった時代には被害の大きさの面などからみれば今以上に自然もその時どきにおいて猛威をふるい、人間との共存の生活を脅かした事実があったはずである。

そのとき人間はどうしたのだろうか。自分たちの心を^{なだ}宥めるために、また自然を宥めるために智慧を働かせ心を尽くしいろいろなことを模索し試みたに違いない。おそらくそういう出来ごとがあったたび毎に繰り返し行なわれ、そしてそれは良いことがあるにつけ悪いことがあるにつけ行なわれ修正もされ、ある意味で納得のいくところでの共存の形を今に残しているのであろう。

その今に残る共存の形の中なかにも最も必要なものとして衣・食・住があると思う。衣食足りて^{えいじよく}榮辱（礼節）を知る、という言葉があるところからもこれらのことの土台の上に他の諸々のものが、ことが存在するのであると思う。これらのことを充足させるために人間ははじめ自然との共存を余儀ないものとして努力をし、そのうちに相手の領域を侵さないときは互いにその一部となりあって感謝もし、互いに謳歌していたに違いないと思う。それがひとつの伝統となり育まれ風土をつくっていったのではないだろうか。今わたしたちが生きている現代というこのときに、かつて共存のために尽力をした人々の心意気（尽力の中なかにも互いの存在を認め共存しているということのよろこびを感じていたに相違ないと

いうことも含めて）を、その恩恵をあますところなく感ずることができる。

仕掛人 という新しい用語をつくり、いつの間にか日本語のなかにすっかり定着させてしまった昭和35年の直木賞作家である池波正太郎のその作品『剣客群像』の解説の冒頭の文章のなかで小島 香は彼の作品を、こう書いている。

池波作品が面白い理由の一つは、登場人物が端役にいたるまで、輝いて生きているからであり、それは作者が〈生活の達人〉であることからくるもののようだ。どんな時でも、いかなる場所でも、自分の置かれた状況を楽しもうと思い、創意と工夫でたちまち生活を享受してしまう作者は、人間とその営みに精通していて、これが作品に生きてくるのである。

当然、出会った人のすべては、鋭く深い観察の目から逃れることはできない。

たとえば、ビルの谷間を歩いている知人が、しばらくすると、松風吹く街道を急いでいるのである。（略）

こうして、人間の不思議さ、面白さ、愛しさが現実からすくいあげられ、作品の中で増幅される。だから描かれている人間は、悪も善も、その生活になんと輝きのあることだろう⁽⁴⁾。（以下略）

こう書かれた池波正太郎の作品のなかで、わたしが最もその〈生活の達人〉と思わせられる場面のひとつに食すことを扱った描写がある。『梅安最合傘』〈仕掛人・藤枝梅安〉という作品、少し抜き書きを試みる。

その夜……。

梅安は、ひとりでおそい夕餉^{ゆうげ}の膳に向っていた。

春の足音は、いったん遠退^{とおの}いたらしい。毎日の底冷えが強く、ことに今夜は、
（雪になるのではないか……）

と、おもわれた。

梅安は、鍋へ、うす味の出汁^{だし}を張って焜^{こん}炉^ろにかけこれを膳の傍へ運んだ。

大皿へ、大根^{せんろつぽん}を千六本に刻んだものが山盛りになってい、浅蜷^{あさり}のむきみもたっぷりと用意してある。

出汁が煮え立った鍋の中へ、梅安は手づかみで大根を入れ、浅蜷を入れた。千切りの大根は、すぐに煮える。煮えるそばから、これを小鉢^{こなざんしよ}に取り、粉山椒^{こなざんしよ}をふりかけ、出

汁と共にふうふういいながら食べるのである。

このとき、酒は冷のまま、湯のみ茶わんでのむのが梅安の好みだ⁽⁵⁾。

これはくだくだしい解説など本当は微塵もいらない。この描写を読みすすむだけで充分である。そのことばの持つ速度に合わせて読みすすめばそれでいいのである。その速度は読んでいくうちにそのことばが知らず知らずのうちに教えてくれている。

読みすすむうちにその描写に出てくるひとつひとつのものを吟味しながらこちらも味わい尽くそうとしているのを感じる。——この時期の大根はうまく埋けたものであればみずみずしくあま味も充分であるに違いない。それをガスの火でもなく石油の火でもなく、今さかんに赤く燗^あきている炭火で焔^あで炊くのか、よくでた出汁で。成程。鍋は黒い鉄鍋で鍋ぶたは粗い木目の浮きでたものだな。浅蜆も頃はちょうどかな。薬味は山椒か。時は夜。底冷えがして雪が降りそう、なのか……湯気が揺れてその部屋の柱・戸障子・壁の一枚一枚に充分にその煮ものの匂いを嗅がせているな。おっと、鍋のふちがそろそろ泡だってきた、箸を……。うん、酒は冷のままなのか。それならどこの辛口かな。湯のみ茶わんの口の厚みはどこのものならその飲み方に合っているのかななどつつぎからつつぎへと想いは展がっていく。そこまでくると、もう堪らない。よくでた出汁で強火でサッと煮た食べ頃の大根と浅蜆の匂いが鼻先に押し寄せる。その匂いだけで、本のこちら側でそれを肴にできる気がする。匂いがたってくる。気分がどことなくそわそわして落ち着かず、自分のまわりにも梅安と同じ場所とものが設定されているような錯覚すら覚える。大根の白、浅蜆のむきみの貝の色、燗^あき火の赤、鍋の黒、よくでた出汁と湯気の色。梅安の動き。これらのものが程よく合って匂いが、味がでてくる。

池波作品にはこういう場面描写や結末の描写に限らず読後感には辛い物を食し喉に渴きを覚え飲んだ時の白湯の味に似ている。喉もとに残してくれる優しい素直なあま味と共にほかっとした安堵感に近い人恋^{めく}しくなるような温もりがある。

匂いと味、色と同じく感覚にたよるもの。いずれも一定の形も、重量も示さない。従って実に捉え難い。上にあげた肴の材料と、鍋・道具の類と酒の色、すべてに色を持っている。そしてそこに設定された場所と時間の枠のなかで実によく互いに映えている。これらのものがみな互いに映えるのには、やはり春を待ち焦がれる気持ちを敢えて押さえてしまうようなこの冬の底冷えのする夜でなくてはいけない。春の暖かな昼下がりでは無論いけないし、のぼったばかりの朝日が戸の隙間からスーッと昨夜ふき込んだ粉雪と一緒にキラキラ輝きながらさし込んでいるようなそんな冬の朝であってもいけない。ましてやそこに

女人やこどもが居たりしては尚更にいけない。

わたしはこの場面の描写に人間の生きていることの^{たの}愉しさ嬉しさを感じ、またそれら全部を抱え込んで美しいと感じる。

条件の整った枠のなかであるからこそこれらひとつひとつのものが冴えに冴え映えてはいるのだが、しかしこの仕掛人・藤枝梅安の生きた江戸時代を越えてこれらのものは今のわたしに異和感を微塵も抱かせずに一緒に舌鼓を打たせてくれ、そして満喫させてくれる。これは一体なになのであろうか。

梅安のこうした動作のひとつひとつは整えられた条件のなかで実に完璧に在り、そしてひとつの描写されたそういう場面としてのいろあいを渋味の強いものではあるが鮮明に持っているものである。

吟味して決して派手さのない材料を選ぶ心、そうしてその材料に^{あきわ}相応しい道具を選び用いる心と。その在るものを最大限に大切に扱おう（生かそう）とする心の模様がいろあいがその折々の光の在り方で精いっぱいにあらわれているからなのであろうか。

承

人は何故にものをつくるのか、と思う。

米をつくること。野菜をつくること。花をつくること。詩を書くこと。小説を書くこと。戯曲を書くこと。舞台に立って演技をすること。油絵・水彩画を描くこと。彫刻をつくること。音楽をつくること（演奏すること）。民芸・什器をつくることなど。

わたしたちの暮らしのなかで自然との共存というだけではない、人の意匠に添わない、支えられないものは何ひとつとしてないという気がする。

米をつくり野菜をつくること。これは食欲を充足させるには絶対になくってはならぬものであるが、それが口に入るまでの経過で料理をするということがある。土産土法 というその土地その土地での材料をその土地のやり方で料理するという。それがその風土その風土においてあるということ。できるだけ美味に、できるだけ美しく材料を生かす方法。空腹を満たすだけではない、食欲を満たすというところにその意匠を感じる。それでは他のものは——詩を書くこと、舞台上で演技をすること、絵を描くこと、音楽をつくることはどうなのだろうか。その つくる ということのなかには[・]これがあるからなのだという決定的な面白味・たのしみがあるからする行為に違いない、と思うのだが。

宇野千代は『阿吽の呼吸』と題する文章のなかで次のように書いている。

私の手の中に、昨日までの仕事の記憶が残る。毎日書くのだ。天狗屋のお爺さんのやうに毎日書くのである。書けるときに書き、書けないときには休むと言ふのではない。書けない、と思ふときにも、机の前に坐るのだ。すると、ついさっきまで、今日は一字も書けない、と思った筈なのに、ほんの少し、行く手が見えるやうな気がするから不思議である。書くことが大切なのではない。机の前に坐ることが大切なのだ。机の前に坐って、ペンを握り、さア書く、と言ふ姿勢をとることが大切なのである。自分をだますことだ。自分は書ける、と思ふことだ⁽⁶⁾。

傍から見れば、あれ程の才能のある人の書く文章なのか、と驚いた。

彼女は40歳を過ぎた頃から、文学はただ面白いことを書くだけではない。確固とした目的がある、と考えるようになったとこの抜き書きした文章の前の方で書いている。そしてその目的である主題を探し、表現することを模索することが多くなったら、「仕事が遅くなった」と書いている。そのことを徳田秋声と比較し、秋声は神さまであるから一晩に70枚書いても、それは軽薄なものではなかった、と書いている。そして、しかし「仕事が遅くなった」ということで神さまを恨みはしない、自分がのろいのは当然のことであると書き、速い遅いではなく、何をどう正確に書くのかということに関心があるのだ、とも書いている。

この文章に驚きを感じた。しかし同時にものをつくる、ものを書くということの奥義を人目をはばからずに篤と見せて貰ったような仕合わせな思いがある。しかし更には何が彼女を机の前に座らせ自己暗示をかけペンを握らせ、だまさせるというその行為を強めているのか。何が駆り立てているのか。その奥の深い深いところで衝き動かしているものがあるはずで、それは一体何なんだろうかということに本当はもっと興味があるのである。

かつて一びきの野良猫を女性ばかりの住人のアパートで飼っていたことがあった。

その野良猫は器良の頗る良いメスのキジネコだった。九月の終わり頃、洗たく物干し場兼用の庭にふっとやって来てミィーと啼いたのである。アパートは大家さんがクリスチャンであること、学園を経営していたことなどから紫苑寮^{しおん}と呼ばれていた。わたしたちはいつの間にかその野良猫を しおん谷ののら と名づけて母親になりかけていた彼女にエサを与えると同時に訓示も与え、いろいろと共存生活のコツを飲み込ませることに愉しみを味わっていた。

住人の全部が猫好きという訳ではなく、それぞれの対応の仕方があって初めてネコを抱いたわたしなどは人間以外の生きものと人間との暮らしぶりに大いに興味を持ったもので

ある。住人の殆どが学生であることから、長い休暇を含めて一年間ぐらいの間に三回のお産をしたのらはお産のたび毎に周囲の扱いの変化にも慣れなくてはならなかったのだが……。三回目のお産を経験した彼女は猫ギライのわたしでもエサを与えたいくなるようなふっとやって来た頃のネコではなくなっていた。それはのらに責任があるのではなく、一方的にわたしたちにあるのであった。のらは他のネコや自分の子どもたちとの交わりの他にわたしたちとの交わりがあった。わたしたちとの交わりは彼女の一日の暮らしのなかで量的にはそれ程沢山の時間を費やすというものではなかった。しかし、その費やす時間の量とは関係なしにとっても重要な暮らしの一部だったのである。わたしたちはのらに対して愛護するということ以前に保護するということの最低のことさえ怠ったという事実をつくっていた。

——わたしたち住人は しおん谷 だけで暮らしている訳ではなかった。住人のそれぞれは外との関わりの中かでいろいろな問題を抱えていた。——重い足どりで帰宅した時玄關で迎えてくれる親子。食事のときの様子。仔ねこが初めて自分だけでウンチをした時のこと。のらが仔ねこたちにネズミの捕り方を教授している時の様子。親子三匹がコタツのまわりで遊び惚け仔ねこが思わず粗相をしてしまった時ののらの様子。夜、机に向かって鉛筆を動かしている指にジャレつき、騒さがって部屋の隅に追いやられることの繰返しのなかで疲れるとあきらめて空いている左手首を枕に寝込んでしまう仔ねこ。朝出掛ける時、ズボンを駆けのぼって来て爪でぶら下がり顔を見上げながらミィミィなく仔ねこ。それを行儀よく坐って見守っているのら。——わたしたち住人の殆どはこののら親子のやりとりからどれだけの慰めと喜びを貰ったか知れない。しかし、それも初めての仔ねこたちとの親子の別れを告げさせたあとから次第に変わっていった。よく言い含められたのらは別れる時も行儀よく座りジッと目を凝らして動かず、そのあとも習性を破り子どもを探してなくということは決してなかった。それはわたしたちの心を痛く刺した。長い休暇の訪れと共にわたしたちとの空白のときが生じ、一切が断れたことでのらは少しずつだが確実に野良猫として成長を続け交わりもそれ相応のものとなっていった。三回目のお産後の彼女は初めての時のような母親の責任を持たなかった。難産であったにもかかわらずわたしたちが傍で見えていない時でも仔ねこを置いて出歩いた。その結果二匹の仔ねこは産後三日目で恋仇のネコに奪われてしまった。仔ねこのなくなった母親の乳房は固く張り黙っていることさえ辛い様子だった。見かねてわたしたちは、その固く張った乳房を揉みほぐしてやりながらそれぞれが自戒をした。

アパートの内と外での暮らし。それぞれがいろいろな筆で描きはじめたばかりの人生模様のいろあいに一喜一憂しながら歩いていた時にふっとやって来てほんの束の間だったが

関わり合った。関わり合ったことが内と外でのその都度の喜怒哀楽と重複させたり。またそのことから新しく派生させることの契機の原因力みたいなものとなったり。そこで更にいろいろな人と人との関わりが深くも浅くも生じた。

わたしはこれらのことをいつの日かあらわしてみたいと考えた。織物で言えば、アパートの内を経糸に外を緯糸に錦紗のように華やかなものではなく紬の趣のある反物に織りあげてみたいと考えた。

時を経て、多感な時を過ごしたあの時を大切に思えば思う程あらわしてみたいと考えるようになった。

書きたい、あらわしてみたいと思いはじめてからどれほどの月日が経ったのか。思いは募るが、募るだけで手の方は一向にすすまず、動かずというところである。ということであれば、思いは募ると繰り返しているが、それはほんの口先だけのことで思いの方は本ものではないのではないのか、などと自嘲したり、そのあとでは自戒してみたり繰り返しののである。

しかし書きあらわしたいという思いは沈澱したおりのように在る。そしてかつて書きあらわしたいと一度でも思ったことが、考えたことがあるものにとってはそれは一生成すまでは消えることのない罪だと言わんばかりにその時どきにその存在を暴露するかの素振りで刺戟を仕掛けるのである。

繰り返しの、この行為として実ってゆかぬ心の動きはどこからくるものであろうか。人生の最も多感な時と言われている時に素晴らしい人たちに出遭い、素晴らしい時を過ごすことができた、それだけのことである。自分のなかでそれを感じ取り今に持っていることができているのなら、それが今に続いているのなら、それでいいのではないか。別に書きあらわすなどという行為をとらなくとも。しかしその行為をとらなければ自分のなかに金字塔の如くの確実なものとして摺り取ったままで仕舞っておけない不安があるからなのだろうか。その不安が、暴露するかの素振りに刺戟され反応しているのであろうか。それとも書きあらわしたという結果ではなく、今書きあらわしているのだという継続している行為そのもののなかに秘められている何ものかに魅せられてしまっているのだろうか。その秘められている何ものとは在るとするなら一体なになのであろうか。

不意に訳もなく筆を握りたくなる時がある。まっ白で無限であるかの空白の空間を装い自負しているかの紙面に一瞬の鮮烈な戦いを真向からのぞみ・挑みつつ、それぞれの領域の分割を図り拮抗を続けながらも埋めていく文字を送り出す手と、その動きを凝視する眼

のはたらきを支配するかの手動きが欲しくなることがある。そういう時にはよく研がれた鉛筆があるとよい。芯の先が針のように鈍く光っている濃いめのものとよい。その気持ちに素直な後押しの声援を聴いているような気持ちになるから。そういう時の頭脳は透明な雲母の薄板が冬の寒風に吹きさらされているかのように冷たく冴え、胸はあかく熱く煮え滾っているものも少しの時をおくと、今度は実に冷え冷えとしたものになり透明な水の流れのような濃淡の色をあらわしてくる。そしてその流れとなったものはいつの間にかおきた風に煽られ次第に速度を増し加え、渦まきのように水色の濃淡を見せたままぐるぐると施回を始める。最初のうち飛沫をあげていたものがだんだんなくなり、次第に白い点の明滅が遠く近くあらわれてくる。それが見え始めると眼は他のものを見ることを忘れたのか離れない。

白い光の点の明滅の繰り返しのなかに媚薬でも仕込まれているのか、甘美な誘いのときを感じる。非常に刺戟的なときの繰り返しである。それがひとつのものではなくあちらにもこちらにもあるようで気が漫ろとなり知らず知らずのうちに自分自身を駆り立てて仕舞うのである。駆り立てられているということのなかにも甘美な歓びを味わいながらもしかしやはり動かされている自分に、また相手の正体を見定められずにいることに苛立つ。苛立ちは醜を生み出しかねない。その醜の支配下に置かれることがないように、そのためにもそれを出来るだけはやいうちに手中に納めて仕舞おうと決心をする。そうすれば、それは自分の手のうちで自在に操ることが可能なのだからと。

しかし、つい欲を出すとそれは消えて失くなる。まるで存在したことさえなかったかのように跡形もなく消え失せる。夢・幻を見たあとに残る空しさ、むしろ見ない方がまだよかったという悔いにも似た空しさが残る。そういう時のあとはいくら待っても、心静かに待っても無駄なのである。定期的に訪れてくるものではないのだから。

開高 健は『靴を投げて』の文章のなかで次のように書いている。

ブラハの薄暗い下宿にたれこめたきりで『アメリカ』を書いたカフカの例がある。しかし私は想像力が貧しいから経験という果実から酒をつくるしかないのである。経験から分泌されるものを書く。荒涼とした心の冷暗の箇所には瓶を寝かせて待つのである。忘れたそぶりをして待つのである。これはそぶりであって、忘れるのではない。しばしば作品は直視すると猫のように逃げていくから、ちょっとそっぽ向くふりをして、向うからよってくるのをじっと待つのである。そしてそれを克服できたとき、私は空虚になるから、どこかへ出かけて行って、靴を投げてみるのである⁽⁷⁾。

この文章読みはじめの時何やら雀躍りしたくなるほど嬉しく、矢鱈と嬉しくて仕方がなかった。しかしそのうちそれは羨望と嫉妬に変わっていった。——この人は知っているのだ。わたしの知らない、持ち得ない^{すべ}術を。あの甘美な誘いの時を自由に操り天翔ける術を。『阿吽の呼吸』を書いたあの宇野千代と同じく身につけて持ち歩いているのだ。わたしはその術以前にあの甘美な誘いの正体の片鱗さえも掴めてはいない。その正体が判らぬうちは模索を続けるしかない。偶然にしか訪れてこないものだとすることに拘泥せず『阿吽の呼吸』の文章に見せて貰った奥義に頼り、まず机に向って坐ってみようか……。

東山魁夷は『風景開眼』という文章のなかで次のように書いている。

あの風景が輝いて見えたのは、私に絵を描く望みも、生きる望みも無くなったからである。私の心がこの上もなく純粹になっていたからである。死を身近に、はっきりと意識ある時に、生の姿が強く心に映ったのにちがいない。

自然に心から親しみ、その生命感をつかんでいたはずの私であったのに制作になると、題材の特異性、構図や色彩や技法の新しい工夫というようなことにとらわれて、もっとも大切なこと、素朴で根源的で、感動的なもの、存在の生命に対する把握の緊張度が欠けていたのではないか⁽⁸⁾。(以下略)

この文章はこれからも模索を続けていこうという今のわたしにとっては、その方向づけとなる暗示を多分に示して余り有るもののような気がする。

注

- (1) 前田雨城 『色』 法政大学出版局 1980年 iii 頁
- (2) 『廣漠和辞典』 諸橋轍次、鎌田正、米山寅太郎共著 大修館書店 1982年 下巻 347 頁
- (3) 榊 莫山 『書のイメージ』 美術公論社 1982年 13～15 頁
- (4) 小島 香 『剣客群像』 文藝春秋 1979年 309～310 頁
- (5) 池波正太郎 『梅安最合傘』 講談社 1982年 190～191 頁
- (6) 宇野千代 『私の文章修業』 朝日新聞社 1979年 124 頁
- (7) 開高 健 『旅』 作品社 1983年 14 頁
- (8) 東山魁夷 『旅』 作品社 1983年 19 頁